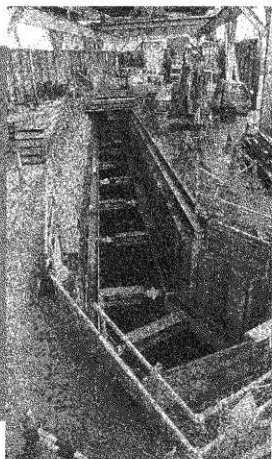


旧紫川遺跡第7次発掘調査概要報告書



1999

名古屋市教育委員会

例言

- 1 本書は、名古屋市中央区栄一丁目若宮人通地内に所在する旧紫川遺跡の第7次発掘調査にかかる発掘調査概要報告書である。
- 2 本調査は日本電信電話株式会社による通信地下設備設置工事に伴うもので、面積61㎡を対象とした。
- 3 本調査は平成11年1月11日から同年1月22日までおこなった。
- 4 本調査は、名古屋市教育委員会が実施し、見晴台考古資料館学芸員、田原和美、野澤則幸が担当した。
- 5 発掘調査及び資料整理に際しては、下記の皆様にご協力、ご教示賜った。(順不同、敬称略)
日本電信電話株式会社、日本電話施設株式会社、大崎園芸有限会社、仲野泰彦、金子健一、小浦美生
- 6 出土遺物および記録類は、名古屋市見晴台考古資料館が保管している。
- 7 本書は、館学芸員の協力を得て野澤が執筆した。

I 位置と環境

旧紫川遺跡周辺は都心部の一角に位置することから旧地形が殆ど残されていない状況にあるが、過去の調査によって、栄から熱田方面に続く台地地形を東西に区切るようにして入り込む、谷筋部分に当たることが判明している。また、そうした地形を利用して、遺跡名の由来となった江戸時代の絵図にある「紫川」の流路が設営され、石垣護岸が構築されていることを確認している。また、これまでの発掘調査において、縄文時代早期から近世に至るまでの膨大な量の出土遺物を得ていることも、本遺跡の特徴の一つとなっている。

本調査地点は、第2次と第6次調査地点に挟まれていることから、紫川の左岸の石垣列より南側に位置することが事前に判明しており、江戸時代以前の良好な包含層が温存されていることが予測されていた。



- 7-4 壱三歳通遺跡
- 7-5 南大津通遺跡
- 7-7 日出神社古墳
- 7-8 那古野山古墳
- 7-9 浅間神社古墳
- 7-10 小林城跡
- 7-11 岩井通貝塚
- 7-12 放籠町遺跡
- 7-13 日置城跡
- 7-14 西船町遺跡
- 7-15 大須二子山古墳
- 7-16 松原遺跡
- 7-18 富士見町遺跡
- 7-24 旧紫川遺跡
- 7-25 白川公園遺跡

図1 遺跡分布図

II 調査の経過

7次を数える今回の調査区は、堀川にかかる新洲崎橋寄りの地点で、面積61㎡を対象とした。その周辺では、過去、都市高速道路や都市基盤整備関連の種々の開発が行われており、必要に応じて事前の発掘調査を行って来ている。今回も同様に、日本電信電話株式会社による通信地下設備（とう道）設置工事がおこなわれることとなり、同社と名古屋市との間で調査委託契約を交わした上で、事前調査をする運びとなった。

調査区は、地表面から4mを超える深さまで掘り下げる必要があったため、安全対策上、調査区の周囲をシートパイルで打ち囲み、補強工事と防水工事を施してから後、調査に着手した。

調査は現地作業として1月11日から22日まで行い、その後、同月29日まで日を要して器材類や事務所を撤収をおこない完了した。

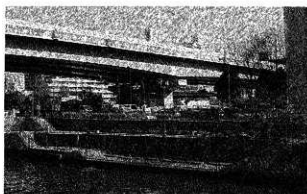


写真2 調査区遠景（フェンスの内側：南西から）

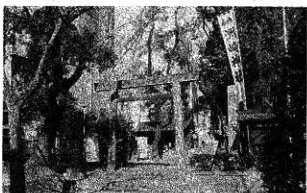


写真3 調査区近くの洲崎神社（南から）

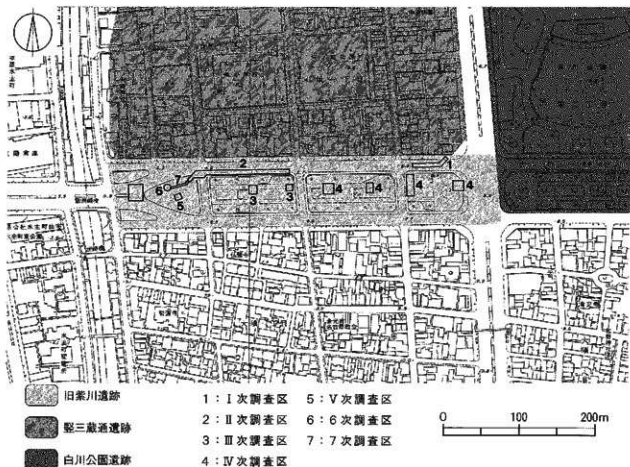


図2 調査区とその周辺

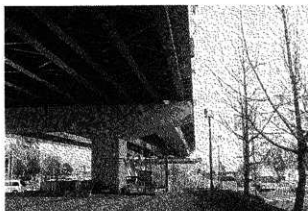


写真4 調査区透景（フェンスの内側：東から）

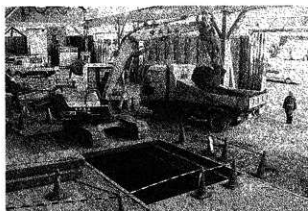


写真5 排土の搬出状況（東から）

III 調査区の概要

調査区内の基本土層は、最上層が戦災ガラを多く含む表土・攪乱層である。層厚実に約3mに及んでいる。それに続く暗茶褐色土層が江戸時代の遺物包含層である。厚い部分で約1.3mを測るものの、後世の攪乱を受けていることもあって出土遺物が相応に少なかった。遺構内の出土遺物でないために大部分が小破片であったが、17世紀から19世紀代に及ぶ陶磁器類の他、緑釉瓦や土鍋など様々な種類の遺物が出土している。石垣などの遺構については、予測どおり検出することはなかった。それより下層では、縄文時代から中世に至るまでの遺物包含層（青灰色砂層主体）が薄皮を重ねるように堆積していた。出土遺物はすべて小破片で摩滅しているものばかりであった。層厚50cm弱で遺物の出土を見ることがなくなることから、同質の砂層を地山として認識した。丁度、その深さで水が湧き出してくる状況があった。

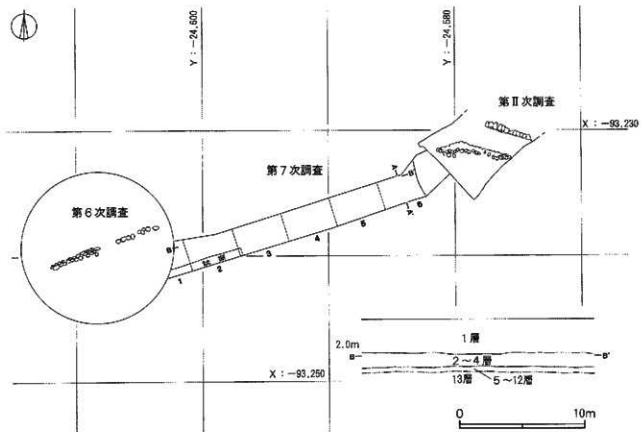


図3 調査区全体図



写真6 包含層の掘り下げ状況（東から）

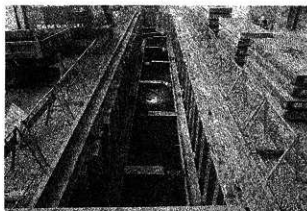


写真8 調査区全景（西から）



写真7 遺物の出土状況（砂層内）



写真9 調査区全景（東から）

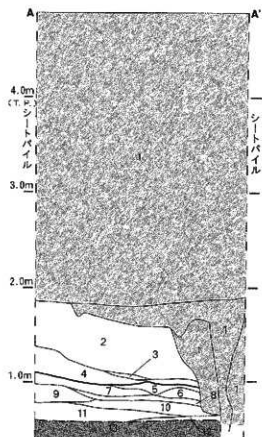
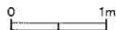


図4 土層断面図

- 1：表土・擾乱層
- 2：暗茶褐色土層 陶器片少量含む。
- 3：青灰色砂層
- 4：暗灰色砂層 砂利多く含む。
- 5：黒褐色粘質土層 有機質多い。以下、12層まで縄文～中世までの土器・陶器片少量含む。
- 6：暗灰色砂層 黒褐色粘質土ブロック多く含む。
- 7：暗灰色砂層 6層にくらべ黒褐色粘質土ブロック多く含む。
- 8：暗茶褐色粘質土層 5層にくらべ有機質が少ない。
- 9：青灰色砂層
- 10：青灰色砂層 縞状に薄く暗茶褐色粘質土が堆積している。
- 11：青灰色砂層 黒褐色粘質土ブロック少量含む。
- 12：青灰色砂層 砂利多く含む。縄文～中世までの土器・陶器片多く含む。
- 13：青灰色砂層 以下、さらに砂層続く。遺物の出土は稀となる。



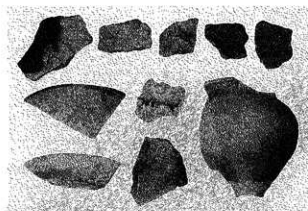


写真10 縄文・弥生

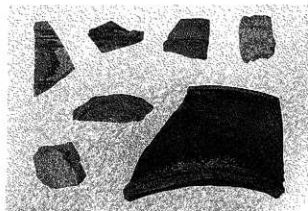


写真11 古墳・古代

IV 出土遺物の概要

出土遺物は縄文後期から近世までと年代幅が広いが、小破片で摩滅しているものが多い。出土量は少な目であった。縄文から中世の遺物はすべて最下層の砂層から出土しており、近世の陶磁器類は主に中層の暗茶褐色土層から出土している。

縄文時代 (図5、1～5) (写真10)

縄文後期前葉を主とした土器片がわずかながら出土している。石器類は認めていない。

弥生時代 (図5、6～10) (写真10)

弥生後期の土器が少量出土している。(6～8)は後期前葉、(9・10)は後期後葉の時期である。

古墳時代 (図5、11～14) (写真11)

5・6世紀頃の須恵器(11～13)と、円筒埴輪(14)がわずかに出土している。

古代 (図5、15～17) (写真11)

8・9世紀頃の須恵器(15・16)の他、被熱している平瓦小片(17)がわずかに出土している。

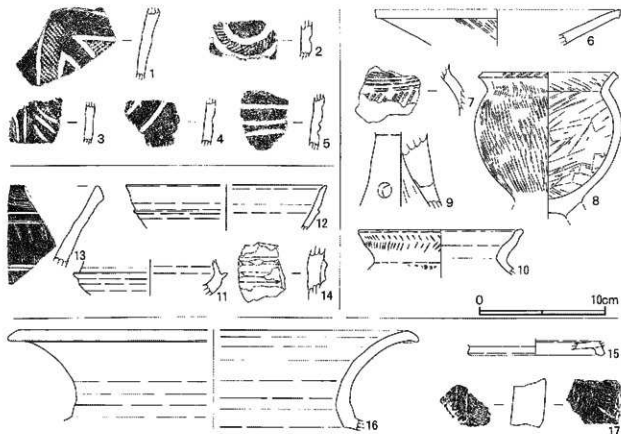


図5 遺物実測図 (縄文・弥生・古墳・古代)

中世 (図6、1~9) (写真12)

12世紀から16世紀代までの陶磁器各種の他、土師皿や土鍋などの土器類がある。

山茶碗の出土量が最も多く、12世紀から15世紀までの東濃産(2・3・5)や尾張産(1・4)のものがある。他には天目茶碗(6)や青磁碗の小片が1点ある。土器類はわずかで、皿(7)や羽釜(8)、伊勢型鍋(9)などがある。

近世 (図6、10~19) (写真13)

17世紀から19世紀代までの陶磁器各種の他、ホウロクや土鍋などの土器類がある。

陶磁器には瀬戸・美濃・肥前各窯の様々な器種がある。白天目茶碗(10)、餌鉢(11)、丸碗(12、13)、広東碗(14)、徳利(15)などの他、緑釉瓦片が1点ある。土器類には土鍋(16)やホウロク(17)、土師質小皿(18、19)などがある。なお、砂層の上位から17世紀代に限定される出土例(10、16、18、19)もごく微量ある。

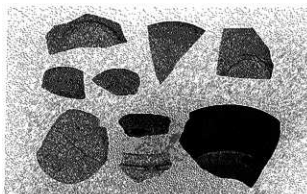


写真12 中世

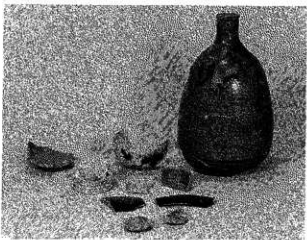


写真13 近世

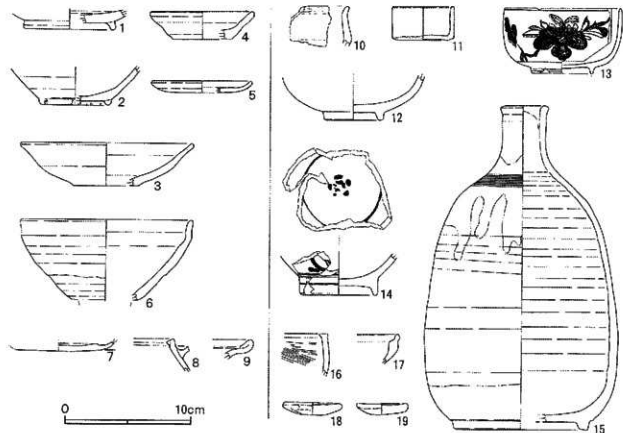


図6 遺物実測図(中世・近世)

V 小 結

今回の7次調査では、古絵図に記された「紫川」の護岸の石垣遺構や、その他の居住の痕跡を伝える遺構については確認することがなかった。第2次と第6次調査で東西に延びる左岸の石垣列が検出されており、その石垣列より外側（南側）では、二次堆積ながら比較的良好な遺物包含層が確認されていた。縄文後・晩期、弥生後期、古墳後期、古代末、中世、近世と長期間で各時代にわたるものであった。わずかに南側に位置する本調査区においても、ほぼ同様の内容を追加することとなり、その出土遺物については先に述べたとおりであるが、改めてここに整理しておきたい。

出土した縄文土器は後期前葉を主とした時期であり、過去の調査内容や、北側に隣接する竪三蔵通遺跡と同じ傾向を示している。

弥生土器は今まで同様後期に限られており、その量は1次調査に及ぶべくもない。また、1次調

査で認められた黒褐色を呈する包含層と同質の土が、本調査区では砂層の上位に薄皮状を呈して堆積している状況を認めている。1次調査の包含層の二次堆積である可能性が高い。

古墳時代以降、古代に該当する出土遺物は量的に最も貧弱である。

中世にあつては、山茶碗の出土が目立った。これについては、日照の少ない高速道路の高架下であることに加えて、覆工板を調査区の上にかぶせて、照明を灯しながら作業をするという悪条件にあったことが原因しているのかもしれない。砂層の下位からもまんべんなく出土している状況から、その堆積時期は概ね16世紀頃と捉えられよう。

近世については、従来どおりの17世紀から19世紀代に及ぶ陶磁器各種の他、土器がごく少量出土している。紫川周辺の土地造成が行われた後に居住した、往時の人々の暮らしぶりの一端を垣間見ることができる。

報告書抄録

ふりがな	きゅうむらさきがわいせきだい7じはくつちようさがいようほうこくしょ							
書名	旧紫川遺跡第7次発掘調査概要報告書							
編者名	野澤則幸							
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館							
所在地	〒457-0026 愛知県名古屋南区見晴町47 TEL052-823-3200 FAX052-823-3223							
発行年月日	西暦 1999年3月19日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	°'〃	°'〃		m ²	
旧紫川遺跡	愛知県名古屋市中区栄一丁目	23100	7-24	35度 9分 33秒	136度 53分 49秒	99.1.11 5 99.1.22	61	通信地下設備 設置工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
旧紫川遺跡	散布地	縄文時代 ↓ 江戸時代	なし	縄文土器・弥生土器 須恵器・陶磁器				

旧紫川遺跡第7次発掘調査概要報告書

1999年3月19日

編集 名古屋市見晴台考古資料館

発行 名古屋市教育委員会

印刷 株式会社 ビア